



人に知恵  
現場に技 130



富窪精機

代表者:富窪俊一社長  
従業員:33人  
本社:愛知県春日井市牛山町1238  
TEL:0568-31-2520  
[www.tomikuboseiki.co.jp](http://www.tomikuboseiki.co.jp)



# 高精度加工で事業拡大へ 設備と加工環境の整備に注力

富窪精機は、自動車の防振ゴム用の金型を主に製造する。「日本に今後残るのは、高精度な金型加工」と富窪俊一社長はにらみ、それに対応するための高精度な設備と加工環境の整備に力を注ぐ。一方で「電気自動車(EV)化の動向に注視が必要」とも話す。防振ゴム用金型以外の事業を拡大するため、最近では燃料電池自動車(FCV)のゴムシール金型など精度が要求される仕事の開拓に努める。

## 「CI」って?

コーポレート・アイデンティティーの略で、企業の特徴や強みを明確にし、統一した企業イメージを構築する戦略のこと。富窪精機は今年3月の新本社工場しゅん工に合わせ、CIを導入。ロゴマーク(=写真)を一新し、コーポレートカラーなども策定した。「格好いい職場にしたかった。デザインは知り合いの女性デザイナーにお願いした」と富窪社

長は経緯を話す。



### ■ 前ページの写真



- ①工場内は整理整頓されており、従業員ものびのびと働く
- ②富窪精機の金型で成形されたゴム製品。中には複雑な形状や高い精度が求められるものも
- ③恒温室では牧野フライス製作所の「iQ500」など高精度で知られる加工機4台が稼働する
- ④本社工場の外観。白基調で洗練されたデザインが目を引く



良い製品を作るには  
最新の設備が欠かせません

(富窪俊一社長)

## 5軸MCが有効

富窪精機は、自動車の防振ゴム用の金型を筆頭に、各種ゴム製品用金型や航空機部品などを製造する。ゴム金型では600×500mm以内なら、試作型から量産型まで幅広く対応できる。

「ゴムにはそこまで精度が要らないのではと思う人が多い。しかし、液体を封入したエンジンマウントなど高機能な防振ゴムをはじめ、ゴムパッキンやゴムシールなど、高い精度が要求される製品もある」と富窪俊一社長は説明する。これらを成形するための金型にも当然、さらに高い精度が求められる。

また、ゴム製品には複雑な形状のものが多く、金型加工では突き出しの長い工具を使うケースが多いという。そのため、ゴム金型には5軸マシニングセンタ(MC)が有効で、同社では牧野フライス製作所の5軸MC「D500」が活躍する。富窪社長は「これまではジグ形状を工夫するなどして、3軸MCで突き出しの長い加工をしてきた。ノウハウを駆使した加工が、5軸MCの導入で一気に楽になった」と満足げに話す。

同社の強みの一つは設備力。「簡単な仕事は中国など海外にどんどん流れる。日本に今後残るのは、やはり難しい仕事だろう」と富窪社長はにらみ、高精度な金型加工に対応できる設備と加工環境の整備に注力する。「良い製品を作るには最新の設備が必須」との考えのもと、2014年にD500を導入。今年8月には同じく牧野の微細精密加工機「iQ500」も追加した。加工環境にもこだわり、工場内には25度±1度の恒温室も用意。D500やiQ500、安田工業のジグボーラーなど高精度で知られる加工機4台が稼働する。

さらに、12年からは技術コンサルタントの指導も受けている。ワークの素材に応じた工作機械や工具、加工条件などを一緒に追求し、技術力の向上に励む。富窪社長は「指導のおかげで、加工条件への認識が変わった」と強調する。

## EV化の動向に注視

同社は1977年に富窪社長の父、富窪哲夫会長が創業した。当初から防振ゴム用の金型製造に携わり、事業を拡大してきた。それに合わせ、春日井市や近隣の小牧市に工場も新設し、3工場体制で運営。だが、富窪社長は「3拠点の管理が煩雑だった」と振り返る。

そこで今年3月、新本社工場を現住所に移転拡張し、旧3工場の機能を集約した。投資額は非公表だが、延べ床面積は約1250m<sup>2</sup>で旧3工場の合計の約1.2倍の広さも確保した。同時にコーポレート・アイデンティティー(CI)も導入。企業イメージの向上にも取り組む。

富窪社長は、今後について「電気自動車(EV)化の動向に注視が必要」と語る。現在は、売り上げの多くを防振ゴム用金型が占める。防振ゴムにはエンジン回りに使われる製品も多く、EV化が進めば仕事が減る恐れもある。

そのため、最近では防振ゴム用金型以外の仕事の開拓に取り組み、事業拡大を目指す。特に、燃料電池自動車(FCV)向けのゴムシール用金型など高精度な加工に注力する。FCVのゴムシール用金型は形状が複雑なうえ、マイクロオーダーの厳しい寸法精度が求められる。実は、iQ500を導入したのもこの加工のため。今後は、iQ500の機械性能と加工条件の組み合わせで厳しい精度要求に応える。富窪社長は「iQ500は金型だけではなく、高精度部品の加工もできる。そうした仕事も取り込めれば」とも期待する。

(桑崎厚史)

### 取材記者より

新本社工場のしゅん工に合わせCIを導入した富窪精機。ロゴマークを一新するなどして、企業イメージの向上を目指す。工場も洗練されたデザインを採用し、記者は率直に「おしゃれだな」と感じた。きっと同社の従業員も職場を誇りに思うだろう。町工場にもCI導入の動きが今後広まれば、製造業のイメージももっと明るくなる気がする。